

# 隠岐島前高校郷土部収録 海士町の民話から (2)

■再話・解説 酒井董美(ただよし) (元・郷土部顧問)

## 魚屋と山姥

語り手：渡部松市さん  
(菱浦 明治28生生まれ)

昔、魚屋の話。  
魚屋はモツガイ(森)の方へ魚売りに行きたそうなの。暮れてしまったので、そこからま、

「どこか灯の見えるところがありや宿借りようかー」と思って尋ねたところが、あるところに灯が見えただけん、そこへ行きたら、おばあさんが綿引くつくとる。ビエンビエン、ビエンビエン引きよる。「なんと、おばあさん、すまんだいど一夜の宿貸してくださらんか」言ったら、「ああ、わしが独りおるもんだけん、汚しげなとごだいで、泊まらと思やあ休んでござつしやいや」ちゆうて言ったところが、そのときに魚の残りがあつた。鯖をやつたら、燃やすとおばあさんは頭からバリバリ、バリバリ食つたげな。

「こりやま、ろくなもんだねえ。ここに休ましてもらつたてや、命取られるーと思つて、「まあ、おばあさん、小用に行きてくつわな」言つと、「はいはい」言つて、そこから行きたところが、その魚屋が早々もどつて、さあどけ通つたかやと思つて、

「どけたり行くところがねえがなーと思つて、それから出たところが、「魚屋さあん、魚屋さあん」言つてそ

のばあさんが呼ぶだいで、  
「こらあま、ろくなとごだねえわい」思つて、そこからぐるつと回つて、その元の家の戸口に行きたところが、

「こら思つたもんだわー言つて、天井に上つて行きて休んでおると、角の大きな囲炉裏があつて、おばあさんがそこで火でエて、「ああ、お客取つそぶつたな」言つて独り言言つて、戸棚から餅を出えてきて、

「焼き餅でも焼いて食わあかなー思つて、焼いて、そこからまた、そのばあさんがひっくり返し、ひっくり返して、いい具合に焼けた。

それからま、おばあさんが居眠りすつた。それで、なんぞここにあれせんか思つたら、竹のイカ串の棒があつた。魚屋さんは腹空いて困つたけん、天井の煙の出つところからついで、焼き餅しやばりあげて(引つ張り上げて)取つて食つて、そか、あんまり美味いもんだけん、まだ二つ食べたに。や、おばあさんが目が覚めたそうなの。

「いつだ、この焼き餅がなくなつたことはねえに、どごぞ魚屋さんがおれせんかー思つて、また、「魚屋さん、魚屋さん」言つて捜すそうなの。そんならま、魚屋さんは、

「上がつてこならいいがなーと思つとつたに、後にやばあさんもくたびれて休んで、「さあ、休んだわい」言つて、魚屋さんは、また暗えもんだけん出られはせんし、明けの朝のえうちにそこから降りて、道々、帰る道を間違えて、そおからほんとの上がったところの道へ出て、それから帰つたちゆう。

昭和50年6月7日収録

聞き手：福原隆正・池田百合香・

大上朋美・小新恵子



■イラスト：福本 隆男

《略歴》 島前高校卒業後上京、埼玉・三郷在住。NHK「山陰の昔ばなし」等のイラストを担当。昭和32年生まれ。崎地区出身。

《解説》この話の元の姿を求めると、「牛方山姥」に帰着する。パターンとしては、①馬子(牛方)が馬(牛)に塩(魚・米)を積んで運ぶ。途中で山姥にあつて馬を食われる。②舟の下や萱の中などに隠れ、舟大工などに助けられて逃げる。③一軒屋に行き娘の援助で天井に隠れる。④山姥が帰り餅を焼くので天井から竿でついて食う。⑤山姥は風呂釜(或いは櫃)の中に入つて寝る。⑥風呂釜に水を入れて煮る。または櫃の中に熱湯を注いで殺す。(関敬吾『日本昔話大成』より)

渡部さんの話は、この話型から見れば前半と後半がなくなり、家にいるおばあさんが山姥だつたといふことになつて居る。伝承の中で多くの変形や省略が生まれるが、渡部さんの話もそのようになつた話と考へていただきたい。なお、渡部さんは生まれは中里。昔話は鍛冶屋のおじいさんからよく聞かれたという。また、子供同士集まつて話をしあつたときに聞いて覚えられたとごだつた。

《郷土部とは》福原隆正、酒井董美の両教諭が顧問となり、昭和50～53年度まで活動。当時の部員は池田百合香(部長)、大上朋美、小新恵子。民話を中心に言語の伝承を収録し、隠岐全体で計927の資料を集めるなど大きな成果を上げた。

《再話者略歴》 酒井 董美：山陰両県の口承文芸を収録・研究しており、元隠岐島前高校郷土部顧問。現在は出雲かんべの里館長。昭和48年海士中学校教諭、49～53年島前高校教諭。著書多数。昭和10年生まれ、松江市出身。